

Over 80 contestants from more than 14 countries

# The 2009 2nd Vancouver International Piano Festival by People with Disabilities

## “UNHEARD NOTES”

“新・音楽文化” 日本発一世界へ

—ご支援のお願い—

迫田 時雄



国際障害者ピアノフェスティバル委員会会長  
NPO法人日本障害者ピアノ指導者研究会会長

幸運にも、先ごろ日本人の若者が、アメリカのバンクライバーン国際ピアノコンクールで入賞の報道がなされ大変評判になりました。たとえ1位が2人同数で賞を分け合ったとはいえ、彼が生来の視覚障害であることは驚きをもって報ぜられています。私も彼の成果を心から喜びたいと思います。

これで 学べることは、3つあります。

1. 彼にとってこういうコンクールのチャンスがあったこと。
2. 入賞についての指導とコーチを務めてくれた、腕利きの指導者を得られたこと。
3. サポートしてくれた家族や仲間があったこと

勿論こういった条件が整ったとしても、このコンクールで賞に届かなかった多くの才能豊かなものがいたことも事実でしょう。

ただ、一つだけ考えていただきたい。

障害にはもっと、沢山の種類があります。もし他の障害だったらチャンスがあっただろうか？

私はこのピアノパラリンピック運動に携わるようになって、生まれて以来寝たきりの少女が体が不自由でも、最後に動く1本の指で喜々として奏でるメロデーに、あるいは、硬直した腕をもう一方の手で支えながら、必死で打ち出すピアノの音に、また、全身マヒでコミュニケーションもままならない女性が、足の指でキーボードを操り自分の音楽を生み出す現場で、——何べん感動の涙を流したことか。

私はここにも音楽芸術の、また新しい感動の分野があることを信じます。

そして、人が不可能だと思う中で可能性を生み出し、生きる証としての音楽を奏でる人々にも、平等にチャンスがあってもいい、という願いから思いついたのが「ピアノパラリンピック」でした。ご承知のようにパラリンピックは、現代ではスポーツそのものにとらえられがちです。しかし、ハンデーターが有るということは、自分の意志で自分の部屋から自由に表に出られないという条件を考えると、むしろスポーツに向かない多くの人々もいるのだ、ということがわかります。

しかし音楽は、その中でも一人で対話ができ、生涯の友となりうるものです。

特にピアノという楽器は、一人で学べますし、それこそ音楽の“基本からすべて”を習得することができます。さらにプロの音楽家として社会参加の道の可能性も開かれています。友として最適の楽器といえるでしょう。

チャンス作りとしても、それがごく一部のラッキーな人々だけのものではなく、どんな障害を持った誰でもが参加でき、それも世界最高の夢の舞台であってほしい。さらに、永遠に続くものであるためには、たくさんの人々のまさに草の根運動としての、願いが込められていなければならない。こうしてはじめられたの

がピアノパラリンピック運動——現国際障害者ピアノフェスティバル——でした。

私たち日本人は、地理的にも海外との交流が難しく、情報がうまく伝わりにくかったこともあって、とかく不必要に海外の評判を気にしすぎる傾向があります。また、海外でいかに評価されたかが独り歩きし、日本人としての独自の評価を遠慮する傾向があります。一方国際的には、奇跡の復興を成し遂げた民族、世界第2の経済大国として、事あるごとに期待されてきていることはご承知のとおりです。

しかしこの勢いもいずれは終焉を告げるでしょう。それはかつての大国の歴史が物語っています。大切なことは、その後にそれぞれ偉大な国々には、それにふさわしい文化遺産を残していることです。わが国もこれから、自分たち独自の国際貢献の文化遺産に着手すべき時に来ていると思います。

もちろん発展途上国への援助、学校建設、上下水道、あるいは衛生施設の補助援助も必要です。しかし、それをもう一步踏み越えた文化の貢献があってもよいのではないのでしょうか。

音楽文化の一つとして、誰もやったことのないピアノパラリンピック運動は、国境にこだわりのない音楽を足がかりに、素直に世界中の人々とのつながりを結べる可能性を秘めています。人智の素晴らしさへの畏敬の念を、感動を通して味わうことができます。

これを日本から世界へ発信しようと思います。そろそろ日本からも、独自に世界へ働きかけ貢献するときに来ていると思います。

ただ、これには多くの国民の皆様の率直な共感と物心両面の後ろだてが欠かせません。

実行委員会としては音楽の強みとしてのコンサートを中心に、全国で支援コンサートを展開、募金活動に懸命になっていますが、皆様には是非、私どもの願いをご理解いただき、それぞれが可能な範囲で、資金あるいは便宜の供与、いろいろな可能性で、お力添えいただきますよう心からお願い申し上げます。

2009年8月